

LSE General Course 留学報告書

## はじめに

2010年9月より翌6月まで、私は英国のLondon School of Economics and Political Science(LSE)に留学しました。経済学部での3年次夏学期終了後、一年間休学し、LSE独自のGeneral Courseと呼ばれるプログラムを利用した留学です。以下ではGeneral Courseの概要と、資金面でご支援下さったロータリー財団の奨学金制度の二点に絞り、留学について簡単に報告致します。

## LSE General Course

<プログラム概要> General Courseは、英国外の大学に通う学部生の為に作られた一年間の聴講プログラムです。聴講生という身分であっても、正規の学生と全く同様に授業を受け、学年末試験も受験します。毎年世界中から約300名の留学生を受け入れていますが、約8割は米国の大学からの留学生で、日本の大学からの留学生はとても少なく、今年度は2名しかいませんでした。

<履修> LSEでの一年間は各10週間の3学期に分かれ、授業は主に第一・二学期(10月~12月・1月~3月)に行われます。第三学期には補講と試験が行われ、6月上旬までには一年間の学事日程が全て終了します。General Courseの学生はLSEのすべての授業の中から履修する授業を4つ任意に選ぶことができ、基本的には学年初に選択した4つの授業を一年間通して受けることとなります。授業科目が少ない分、時間をかけて基本から応用まで丁寧にカバーするという印象です。各授業は週に1コマないし2コマの講義と1コマの少人数クラスで構成されており、前者は教授または講師、後者は博士課程の学生が担当することがほとんどです。講義・クラスとも1コマ60分で、ほとんどの学生は週に10~12コマ授業があるということになります。

<授業内容> 英語圏の他大学と同様、LSEではQualitative(定性的)とQuantitative(定量的)という表現で授業を区別します。日本では文系に含まれる経済学はQuantitativeに入るなど若干の違いがありますが、文系・理系とほぼ同じ区分です。文系科目は書籍や論文などを読むことが予習として課されるのに対し、理系科目ではクラスの前に問題演習を行うことが求められるなど、文・理で授業形態も若干異なります。両方で共通しているのは講義よりもクラスに重点を置いている点です。文系科目ではディスカッション、理系科目では問題演習の答え合わせを行い、トピックへの理解を深めます。

<課題・試験> 上記のように、毎週リーディングや問題演習が課されますが、それに加えて、各学期の半ばと終盤に大きめの課題が出されます。文系科目では1500~2000語の小論文、理系科目では過去の試験問題などが典型的です。クラスティーチャーの採点とコメント付きで返却されるので、授業の理解度を測る良い機会になります。また、学年末(5月中旬~6月上旬)に行われる試験は、各科目3時間(まれに2時間)で、一年間の授業内容全てが範囲です。素点をもとに絶対評価で成績が決まり、General Courseの学生にも正規生と同様、7月中旬に成績が通知されます。

## ロータリー財団国際親善奨学金

<概要> この奨学金は、年齢やステータス(学部生/院生/社会人)など関係なく応募することができる上、留学先教育機関にも制限がなく、とても自由度の高い奨学金です。支給額は25,000米ドルと大きく、返済義務もありません。国際的な認知度も高いため、奨学生であることが出願資料に記載され

LSE General Course 留学報告書

ていれば、有利に働く可能性が高いです。以下に述べるいくつかの義務を果たす必要がありますが、その分財団との関わりも強くなり、資金以外の面でも助けとなることが多々あります。

<ロータリークラブ> 各市町村に一つないし複数、ロータリークラブ(RC)と呼ばれる組織があります。奨学金に応募するには、まず地元の RC(派遣元クラブ)の推薦を得、その後、上部組織であるロータリー地区に出願します。基本的には都道府県毎で一つの地区を構成しており、それぞれの地区で3名から6名ほど奨学生を採用するというケースが多いです。奨学生として選ばれた後、留学先の地区内で RC を一つ指定されますが、そこが受入クラブとして、現地での生活をサポートしてくれます。留学期間中は受入クラブでのスピーチや催しへの参加等が求められます。加えて、年に二度、留学先の言語で簡単な報告書を提出することが求められます。

<出願> 出願に必要な資料は留学希望理由等を記載する所定の文書に加え、高校・大学の成績表、教授等からの推薦状、TOEFL 等語学の成績証明です。スケジュールは上記の派遣元クラブへの出願が留学開始前年の3月頃、地区での選考が5月、国際ロータリーに奨学生として正式に認定されるのが10月以降になります。用意する資料が多く、選考が長丁場であるため、かなり前以て準備しておく必要があります。

### おわりに

以上、私が今回の留学で利用したプログラムと奨学金について簡単にまとめました。もちろん上記以外にも様々なプログラムが用意されています。例えば、英国に限っても、UCL や KCL などロンドン市内の他のカレッジも類似の聴講プログラムを用意しており、オクスフォードやケンブリッジ、ウォーウィック等、ロンドン外の大学にもあるようです。奨学金に関してはオルタナティブが少ないかもしれませんが、先日経団連が奨学金の新設を発表したように、増加傾向にあります。留学はまず情報収集から始まりますので、興味がある方は早期に調査を始めることをお勧めします。

一点、注意を喚起したいのは、制度の変更は案外頻繁に行われるため、過去の留学生の事例を参考にしつつも、自身で最新の情報を得るように努めるべきだということです。上記のロータリー財団国際親善奨学金も近い将来に大きな制度変更が予定されており、米国ではすでにパイロットプログラムが始まっていると聞きます。常に最新の情報に更新するよう心がけることが大切だと感じます。

上でも指摘しましたが、日本の大学から学部生のうちに(特に、大学間協定の交換留学以外で)留学するという事例は非常に少ないようです。最近少しずつ定着してきた Gap Year という言葉があるように、欧米では一年間海外の大学に通うということがごく一般に行われ、各大学も多彩なプログラムを用意しています。学部生のうちに留学するか、学部卒業後大学院へ留学するか、よく考えるべきだとは思いますが、Gap Year を取るという事も、国際感覚を養うという点で有力な選択肢の一つであることは間違いありません。本報告書が、留学について考え、調査する端緒となれば、大変光栄に思います。